

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレーシア・ムスリムの子どもとイスラーム学習

久志本裕子(マレーシア国際イスラーム大学)

夕方5時、6時といった時間に車を運転していると、モスクの近くなどで写真のような服装のムスリムの子どもたちが集まっているのをよく見かける。これは、モスクなどで開かれている、塾のような位置づけの宗教クラス=写真1に通う子どもたちである。マレーシアの多くの小学校は、午前中に通う学年と午後に通う学年が分かれている二部制をとっているため、ムスリムの子どもは、小学校の授業がない方の時間帯に宗教クラスに通うのである。



写真1

マレーシアではイスラームが公式宗教とされているため、公立学校でも「イスラーム教育」という名でイスラームの教育が行われている。他の宗教の子どもたちは、特殊な場合を除いて「道徳教育」という授業を受ける。これらの「イスラーム教育」「道徳教育」は、小学校で平均週4時間(240分)ほどの時間を占めており、日本の小学校の道徳教育が年間35時間に過ぎないのに比べると格段に多い。それにもかかわらず、特に都市部ではムスリム小学生のおよそ90%が、小学校のイスラーム教育に加えて、モスクなどのK A F Aクラスで毎日3時間ほど宗教の勉強をするのである。それほど多くの時間を割いて、一体何を勉強しているのだろうか。

イスラームの宗教に関する学問には、信仰に関わる学習(神学)、信仰に基づく行為に関わる学習(法学)、道徳と心のあり方に関わる学習(道徳・神秘主義)の三つの大きな分野がある。さらに、これらの分野全ての基礎として、聖典クルアーンの読み方や解釈、預言者の言行録(ハディース)に関する学問、アラビア語に関する学問などがある。このように並べると、どれも子どもには縁遠いもののように見えるが、小学校とK A F Aのイスラーム教育はこれら

全ての分野を含んでいる。



写真2

例えば、クルアーンの読み方は、アラビア文字を知ることから始まる。最初は一文字ずつ、次に筆記体のようにつなげた形の読み方、クルアーン独特の音の伸ばし方のルール……と段階的に勉強していくので、ひらがなやカタカナを勉強する以上の時間が必要になる。また、「法学」の分野では、礼拝の仕方や礼拝の前に手や足を洗う方法=写真2=、礼拝のとき

に言う文句などを勉強する。これも基礎的内容は簡単な動作なので、小学生でも分かるのだが、一つずつ教え、実践させ、確認テストなどをしていると、時間はいくらあっても足りない。

こうした学校のような場で、子どもに対してきめ細かい宗教教育を行う、という発想は、マレーシアでは1970年代に「ダアワ運動」と呼ばれるイスラーム復興運動が発展した後に急速に広まった。だが、宗教に割く時間が増えるほど、その効果に対する親の不満も増えるものである。マレーシアのイスラーム教育で「良いムスリム」が育つかは、日本の学校でどうしたら「良い子」が育つか、というのと同じくらい、悩ましい問題なのである。

< 筆者紹介 >

1979年、東京生まれ。東京外国語大学にて博士号を取得後、日本学術振興会特別研究員を経て現職。専門は文化人類学、比較教育学、ムスリム社会研究。東南アジア島しょ部におけるイスラーム知識の伝達について研究している。著書に『変容するイスラームの学びの文化 マレーシア・ムスリム社会と近代学校教育』(ナカニシヤ出版、2014年)ほか。